

次郎長

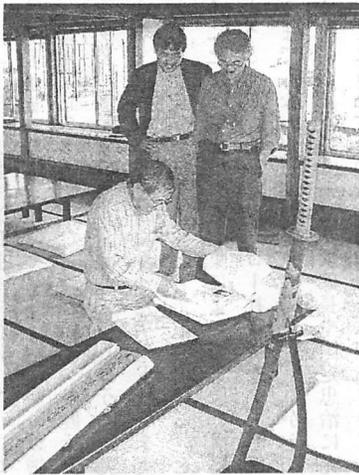
次郎長翁を知る会
会報 第14号
平成14年3月1日発行
発行所
〒424 清水市旭町6-8
清水市観光協会内
TEL (0543) 54-2420
発行人 竹内 宏
題字 田口 英爾
印刷所 株式会社シガイ
TEL (0543) 52-2188

遊侠伝の世界、「歴博」の展示に

国定忠治や次郎長など、アウトローの世界を初めて歴史学研究の対象として取り上げ、「民衆文化のヒーローたち」と銘打って一大企画展が催される。国立歴史民俗博物館が進めるその計画とは――。(上段写真は静岡新聞提供)

千葉県佐倉市にある歴博(国立歴史民俗博物館・館長宮地征人)といえば、歴史学、考古学、民俗学を結ぶ唯一の研究機関として知られるが、その大きな展示計画として、アウトローの世界が取り上げられることになり、平成十六年のオープンを目指して、着々と準備が進められている。

「民衆文化のヒーローたち(仮称)」と銘打った企画展の中心となる高橋敏教授をはじめ、映像プロ



資料調査する高橋敏教授ら。(梅蔭寺にて)

デューサーや作家らで構成される委員ら一行が、次郎長研究のため当地を訪れたのは、昨年六月十五日のことである。

次郎長が国の研究機関の手で真正面から取り上げられるのは、きわめて異例のことだ。梅蔭寺や船宿末廣などを二日ばかりで調査した模様は、静岡新聞や朝日新聞に大きく取り上げられた。

展示の目玉となるのは、国定忠治や次郎長、天保水滸伝の笹川繁造、飯岡助五郎ら幕末に活躍した博徒で、すでに国定忠治関連の現地調査は昨年一月に実施されている。六月の調査では次郎長の木像(鉄舟寺蔵)、使用した刀剣、武器、賭博の用具類などの精細な下見が行われた。ほかにも天田愚庵著の「東海遊侠伝」の初版本や、おちようさん自筆の「覚え書」天田愚庵の「次郎長宛書簡」などが展示品の候補にあげられている。

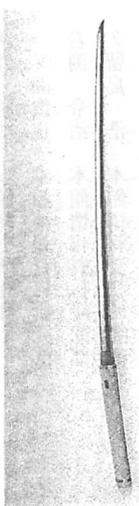
総指揮をとる高橋敏教授は、岩波新書「国定忠治」の著者として知られるばかりでなく、静岡県

史編纂委員の一人でもあり、当地に深い理解のある人だ。

高橋教授は岩波新書「国定忠治」の序にもいう。「歴史は支配する者、される者の、権力と人民の図式的な一元論では済まされぬし、政治、経済だけで決まるものではない。忠治の時代や社会は、幕藩体制の制度や組織を構成する人だけで営まれていたわけではない。体制から排除されたり、あえて組織から離脱した人々の存在には無視できない重みがある。」

と。(傍点編集部) 忠治も次郎長も、ここにいる「体制から排除されたり、あえて組織から離脱した人々」、すなわちアウトローである。彼らの存在は大衆小説や芝居、講談、浪曲、映画などの世界に閉じ込められた形で伝えられてきた。いいかえれば正史ではない「稗史」の世界だ。その世界には正確な史実もあれば、とんでもない誤伝もある。虚と実が紙一重で重なって織りなされる。しかし、「虚実皮膜の境界にあつて人間の怨念や思いが詰めこまれ、人々の記憶の奥に埋藏された稗史にこそ、歴史の真実があるようにも思われる」と高橋教授は結ぶ。

次郎長が愛用した刀胴田貫、刃渡り二尺九寸六分



こうして、忠治や次郎長を主役に、アウトローを真正面から取りあげようとするのが、歴博の「民衆文化のヒーローたち」と銘打った展示企画である。展示主旨にも謳われているように「実証史学で扱われることがなかったアウトローを実伝として歴史学研究の対象として取り上げる。」ということ、幅広い資料収集によって実像を構築しようとしている。アウトロー礼讃でないことはいうまでもないが、国の研究機関が、いいかえれば文部省公認という形で、次郎長や国定忠治に光を当てようとするのは、画期的なことと言ってよいだろう。

展示の具体的な内容は、すでに二年ほど前から展示プロジェクト委員として当代一流の映像プロデューサーが選ばれ、五回を超える展示プロジェクト会議が開かれて詰められている。

「民衆文化のヒーローたち（仮称）」
平成十六年度開催予定 国立歴史民俗博物館

展示プロジェクト委員（◎は展示責任者）

- 嵐 圭史 前進座
- 浅野 秀剛 千葉市美術館
- 小池章太郎 跡見学園女子大学
- 小林 文雄 山形県立米沢女子短期大学
- 米谷 博 千葉県立房総のむら
- 佐藤 雅美 作家
- 沢畑 利昭 映像プロデューサー
- 田口 英爾 作家
- 中山 信如 映画史

延広 真治 帝京大学
服部 幸雄 日本女子大学
原 一男 映画監督

藤井 正人 映像プロデューサー
松浦 利隆 群馬県立歴史博物館
宇田川武久 本館情報資料研究部
大久保純一 本館情報資料研究部
丸山 伸彦 本館情報資料研究部

次郎長足跡の北限を訪ねて

—加賀大聖寺の関所門と山代温泉郷—

駿河には過ぎたるものが二つある
富士のお山に清水の次郎長

「次郎長翁を知る会」史跡探訪バスツアーは平成十三年十月二日早朝、清水市役所前をスタートしました。

今回は、次郎長史跡の北限である、加賀大聖寺関所門を訪ねることをメインに、街おこしで有名な琵琶湖畔にある長浜見学、「二筆啓上火の用心、お仙泣かすな、馬肥やせ」で有名な越前の丸岡城、さらに日本海、太平洋への分水嶺地の白鳥を歴訪、宿泊地は千三百年の歴史をもつ、加賀山代温泉郷のホテル百石石です。到着して、竹内会長、田口会長補佐を中心に、全員で記念写真を撮りました。そして広々とした庭園を眺めながら、ゆったりとした気分で温泉につかりました。

翌日メインである大聖寺関所門を訪ね、宗寿寺の和尚さんより案内、説明をしていただきました。次郎長、大政等が、草津、信州、越前から、加賀

新井 勝紘 本館歴史研究部
一ノ瀬俊也 本館情報資料研究部
岩淵 令治 本館情報資料研究部
久留島 浩 本館情報資料研究部
高橋 一樹 本館情報資料研究部
◎高橋 敏 本館情報資料研究部
仁藤 敦史 本館情報資料研究部
常光 徹 本館情報資料研究部



関所門にて。前列左から三人目竹内会長。

大聖寺に辿る道中は、さぞ難儀であったろうと思わざるを得ませんでした。さらに歴史とロマンを感じたのは、隣の寺は、俳聖松尾芭蕉が、奥の細道で江戸から出発して、この地を訪れ、この寺に宿泊し地元の人々と吟行した地であったといわれている。この街道が重要な日本海をつなぐ街道であったと実感いたしました。

帰りのバスの中では、竹内会長の経済講座があり、現実の日本経済、地域経済をわかりやすく、明確に解説をしていただき、我々一同望外の喜びでありました。

話しは突然変わりますが「田所康雄」を御存知ですか？子供の頃は、悪ガキで手のつけられない不良少年でした。この人が後半生は「男はつらいよ」で寅さんを演じ、国民栄誉賞を受賞した「渥美清」です。若き日の山本長五郎と田所康雄。二

次郎長十七回忌とおちようさんの写真

清水市岡町の月見里神社、通称笠森稲荷さんの近くに住む小島幹夫さんは、おちようさん（三代目）の曾孫に当たる。

西尾藩藩士篠原東五の長女おちようさんが、明治の初め次郎長のところに嫁いだ時に連れてきた



三代目おちよう



入谷はる

人の共通点は前半は、悪ガキ、後半は世のため、人のために貢献しました。次郎長は清水港開港と発展に尽力し、英語塾を開きました。渥美清は、映画、テレビで大活躍をしました。いつまでも心ときめく二人であると思います。

ところで、どうしてこの二人が出て来たかと思しますと、東名高速をバスが通過中に、バスガイドさんは、ビデオで「男はつらいよ」を放映することを提案、拍手により、スタートしました。

「次郎長と寅次郎」、波乱多き二人の人生に、高速バスの座席で想いをめぐらせ、窓の外を見ますと、時あたかも満月が大きく、明るく飛び込んで来ました。

「満月や次郎長さんも寅さんも」
お月さんは、次郎長翁と寅さんをごのように見ているのだろうか？
(運営委員・室伏尚美)

長男清太郎（入谷氏）とはる夫婦の間に生まれたのがてい（小島順と結婚）と麟助（入谷家を継ぐ）の一女一男。ていは子福者で、七男一女を儲けたその末子になるのが幹夫さん。

この小島幹夫さんから、このほど次郎長資料室に、明治四十二年梅陰寺で行われた次郎長十七回忌の集合写真が寄贈された。（次頁参照）この写真は有名なものであるが、これまで紹介されたのはすべて複写でオリジナルはきわめて珍しい。タテ三十三センチ、ヨコ三十九センチの額ぶち模様で飾られた厚手の写真板紙の裏には、ていさんが鉛

筆で書き込んだという主な人物の名前が、うつつらと読みとれる。

次頁写真の前列中央に黒紋付の羽織で端然と坐っているのがおちようさん、七十二歳。その左側に子供を抱いている口ひげの人物が入谷清太郎。子供はていさんの長男小島茂であるが、ていさんは二列目の右から二番目、束髪（当時二〇三高地と呼ばれた髪型）に結った大柄の女性で、おちようさんからいえば孫娘に当たる。その母、清太郎の妻はるは二列目の左から二人目に立っている。

おちようさんと並んで前列に坐っているのは、自分たちの中でも幹部の者たちで、おちようさんの右隣が次郎長葬儀の委員長をつとめた当目の岩吉。関東市こと加藤市五郎は前列左から二人目、次郎長の跡目を継ぎ次郎長二代目を称した小沢惣太郎は、おちようさんから数えて右へ四人目に坐っている。

ところで、おちようさんの顔写真は、これまでおちようさんの長男清太郎の嫁である入谷はるの顔写真が間違っ使われてきた。その原因ははっきりしないが、昭和十七年六月十四日の朝日新聞「次郎長五十年祭」の記事に使われた写真が発端らしい。それから六十年を経た今日まで、はるさんの写真がおちようさんと間違えられて使われ続けてきた。もともとはるさんは、おちようさんの姪に当るから似ていることもあるが、最初に間違いを指摘したのは、戦前の入谷家近くに住み、はるさんの晩年に接している本会会員の天野香さん。子孫の小島幹夫さんも、おちようさんとして使われている写真が、はるさんであることを認めた。



明治42年6月12日、梅陰寺で行われた次郎長17回忌の参列者。前列左から4人目が三代目おちょう。その左が長男入谷清太郎。向かって右隣が当日の岩吉。前列左から2人目が関東市こと加藤市五郎。前列右から3人目が次郎長一家二代目を継いだ小沢惣太郎。入谷麟助は二列目おちょうと清太郎の間。

◎春の史跡探訪ツアーは川根町訪問

温泉や水を生かした町づくりばかりでなく、静岡新聞夕刊コラム「窓辺」に健筆をふるった河野町長が、知る会との地域交流を申し出られた。ことの発端は、平成十三年の秋、竹内宏会長とさる会合で会われたとき、河野町長の祖父が次郎長の子分だったとの話があり、明治初期の珍しい資料がたくさん提供された。

この後、話がとんとん拍子で進んで、この春の次郎長史跡探訪ツアーは、川根町訪問と決定した。竹内宏会長も同行して、竹内節をたっぷり聞かせるばかりでなく、河野町長はじめ川根町の人たちとの交流、町営温泉入湯、満開のお花見など、楽しいスケジュールが組まれているので、是非ご参加下さい。

（川根町訪問バスツアー）

日時・平成十四年四月四日 八・三〇出発

訪問先・川根町町営温泉、ふれあいの泉、資生堂アートハウス等。

参加費・五〇〇円

編集室から

●次郎長翁を知る会ホームページ情報

当会ホームページでは現在、会報十三号までのバックナンバーを公開中です。

『会議室から』というページを開設しました。毎月の運営会議内容や最新の情報、こぼれ話などが満載です。 <http://jirocho.org/kaigi.html>

（広報部 中田元比古）